

# 「学校のチーム化」を目指す「スクールミドル」の役割に関する研究

―校務分掌上の立場を利用して―

学籍番号 189957

氏名 川口 剛史

主指導教員 餅木 哲郎

## 1. 背景

複雑化・困難化した学校現場が抱える課題の解決を背景として、平成27(2015)年に中央教育審議会は「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（答申）」を公表した。教員以外の多様な専門家や専門機関と連携した学校運営が重要なことに異論はない。しかし、「チーム学校」体制の中核となる我々教員は、学校現場でどれだけチームとなって、働いているだろうか。筆者は「学校がチームとなれていない」ことが実習校の課題であると考えた。

## 2. 目的と方法

筆者は「学校のチーム化」のために「スクールミドル」が校務分掌上の立場を利用してできることを検討し、実行することが必要であると考え、実習校であるM市立N中学校において、以下の実践研究に取り組むことにした。

### 研究Ⅰ 三部長の立場を利用した「プロジェクト会議」の運営

校務分掌の長である「三部長（学習活動部長、生徒指導部長、人権・同和教育部長）」の一人としての立場を利用して、「人材育成の推進」の視点を持ちながら、自由参加型の会議である「プロジェクト会議」の運営を通して、教職員から意見を集めたり、学校運営に携わったりする機会を作ったりする。

### 研究Ⅱ こども支援Coの立場を利用した「専門スタッフ」の活用

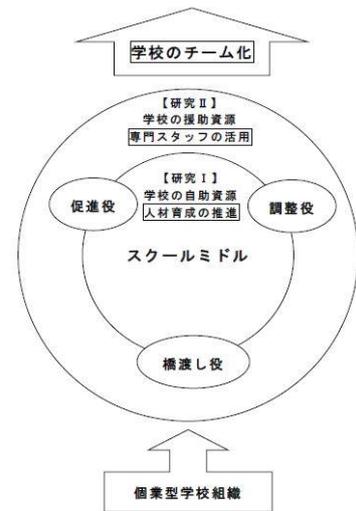
こども支援コーディネーターの立場を利用して、教職員が校内研修や学年会議の中で専門スタッフとかかわる機会を増やすことで、実習校における専門スタッフの参画を促進する。

まず、文献研究において用語を定義する。また、研究Ⅰ・Ⅱにおける評価の方法について検討し、評価は自己評価、他者評価（インタビュー調査）とする。続いて、研究Ⅰ・Ⅱにおいて筆者の校務分掌上の立場を利用した実践について記述し、それぞれの実践に対する評価を行う。最後に、研究全体を通して「学校のチーム化」を目指した「スクールミドル」の役割について導き出す。

### 3. 結果と考察

研究Ⅰでは「プロジェクト会議」を通して、若手や中堅の教員から様々な意見を集めることができた。また、校内研修の企画・実施につなげることができた。教職員からの反響や企画に携わった教員からの手応えも見られた。また、管理職などへのインタビュー調査の結果、実践に対する肯定的な評価を得られた。「プロジェクト会議」には意見が言える場、共有できる場、若手が育つ場としての機能があると分かった。一方、運営には「スクールミドル」としての力量、バランス感覚が問われることも見えてきた。

研究Ⅱでは3人の専門スタッフ（SC、SSW、SV）と連携した4つの実践を行った。教職員からは専門スタッフとの連携に対して、前向きな意見が得られた。また、管理職と専門スタッフへのインタビュー調査の結果、実践に対する肯定的な評価を得られた。「スクールミドル」が学校と専門スタッフとの橋渡し役となり、意識的に活用する機会を設定することで、教員にとっての成長だけでなく、専門スタッフにとっての働きやすさにもつながることが分かった。



### 4. まとめ

「学校のチーム化」を目指す「スクールミドル」の3つの役割を導き出した。

	学校の自助資源の活用	学校の援助資源の活用
① 促進役	個々の教職員が分有している情熱や考え、意見を引き出し、それらを積極的に学校改善のために生かしていけるような仕組みづくりを行う。	学校が把握している情報を整理・共有することで、専門スタッフや外部機関が有している経験や知見を引き出し、課題解決に役立てていく。
② 調整役	バランス感覚を発揮し、管理職や他のスクールミドルと連携をとりつつ、若手教員の意見を聞きながら、教職員の中で意見を調整し、学校運営を行う。	専門スタッフや外部機関などから得た見立てや示唆を可能な形で調整し、教職員に提案していくことで、新たな取組みを作ったり、学校運営を行ったりしていく。
③ 橋渡し役	学年教員だけで課題解決しようとするのではなく、他の分掌との連携など、学校が活用できる自助資源に注目をし、その効果的な活用を図るために、教職員同士の橋渡しを行う。	学校の教職員の中だけで課題解決しようとするのではなく、専門スタッフや外部機関など、学校が活用できる援助資源に注目をし、その効果的な活用を図るために教職員との橋渡しを行う。

